

本書で取りあげたクマ類の生物学的特徴

マレーグマ (サンベアー、ハニーベアー)

IUCN カテゴリー：情報不足、CITES 附属書：

マレーグマ (*Ursus malayanus*、あるいは *Helarctos malayanus*) は、インド北東部、ミャンマー、バングラデシュ、中国南西部、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、マレーシア、ブルネイ、インドネシアの森林に生息する。一般に、ボルネオのマレーグマ (*H. m. eurypilus*) は、スマトラやアジア本土に生息するマレーグマ (*H. m. malayanus*) よりも小型であり (Horsfield 1825; Maijaard 2004)、形態や頭蓋計測値の違いから、2 亜種への分類が提案されている。

現存するクマ科 8 種のうち最小で、極端に長くカーブした爪、内側に曲がった前肢、相対的に大きな足掌と強力な顎の筋肉、不釣り合いに大きな犬歯、クマ科の中でもっとも長い舌を持つ。

熱帯常緑雨林が主要な生息地である。この熱帯雨林にはさまざまな生息地タイプが含まれる。すなわち、低地のフタバガキ科林、泥炭湿地林、淡水低湿地、石灰岩・カルスト状の丘陵地、丘陵地森林、低山地林、乾燥落葉樹林、その他の森林タイプである。

雑食性であり、シロアリ、アリ、甲虫の幼虫、ハチミツを主に食べ、多種の果実類も食べる (Wong et al. 2002; Fredriksson et al. 印刷中)。野生のマレーグマの行動や社会構造はほとんどわかっていない。マレーグマには明確な繁殖期がないと考えられており、通常 1 仔を産む (Schwarzenberger et al. 2004)。

(Gabriella M. Fredriksson)

ツキノワグマ (アジアクロクマ、ヒマラヤグマ)

IUCN カテゴリー：絶滅危惧 類、イラン、パキスタンの個体群は絶滅危惧 IA 類、CITES 附属書：

ツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) は中型のクマで、オス成獣で 50 ~ 200kg、メス成獣で 40 ~ 125kg になる。東は日本から西はイランまでアジア全域に広く分布している。現在、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、中国、ロシア、バングラデシュ、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、韓国、北朝鮮、台湾、日本での生息が報告されている。本種は一般に次の 7 亜種に分類される。*U. t. japonicus* (日本) *U. t. formosanus* (台湾) *U. t. ussuricus* (ロシア南東部、韓国、北朝鮮、中国東北部) *U. t. gedrosianus* (イラン、パキスタ

ン) *U. t. laniger* (ヒマラヤ西部) *U. t. mupinensis* (中国南西部) *U. t. thibetanus* (その他の地域) Pocock 1932; Wozencraft 2005)。

植物を主な食物とするが、昆虫、ミツバチの巣、軟体動物、哺乳類も食べる。食性は季節的、地理的に異なっており、温帯では、木本と草本の葉、タケノコ (春と初夏) 木本の果実 (秋) が一般的である。

4 ~ 5 歳で繁殖可能になる。繁殖期は早い地域では 5 月頃、遅い地域では 8 月頃と、地域によって異なっている。一般に 1 ~ 2 月に産卵し、産仔数はたいてい 2 頭である。冬眠は寒冷な北部では比較的長く、期間は一般に 10 月 ~ 4 月と考えられる。温暖な分布の南部では、年中活動することが報告されている。

(大井 徹, 下稲葉さやか, 糞 継恩)

ヒグマ

IUCN カテゴリー：低リスク、CITES 附属書： 、ブータン、中国、メキシコ、モンゴルの個体群と *Ursus arctos isabellinus* は、

ヒグマ (*Ursus arctos*) は、クマ科 8 種の中ではホッキョクグマ (*Ursus maritimus*) に次いで大型の種である。オス成獣は 130 ~ 400kg、メス成獣は 80 ~ 230kg になる (McLellan 1994; <http://www.bearbiology.com/brwnbear.htm>)。体サイズに違いの生じる最も大きな要因は、食物条件である。ヒグマは他のどのクマ科よりも広い地理分布をしており、ヨーロッパ、中東、アジアの大部分、北米西部が分布域に含まれる。アジアでは、トルコ、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュ、ネパール、ブータン、中国東北部と西部、モンゴル、ロシア、日本の北海道に分布している。生息地も非常に変化に富んでおり、砂漠やステップ、森林、ツンドラが含まれる。

雑食性でさまざまなものを食べるが、地域によって食性は異なる。しかしながら、主要な食物は果実、草本、塊茎といった植物質である。また、昆虫、魚類、小型・大型哺乳類も食べる。

交尾期は 5 ~ 7 月で、2 ~ 4 仔を冬眠中の 1 ~ 2 月に産む。メスはたいてい 4 ~ 5 歳で繁殖齢に達し、繁殖終了年は 28 ~ 29 歳と推定されている (Schwartz et al. 2003)。

(間野 勉)

ナマケグマ

IUCN カテゴリー:絶滅危惧 類、CITES 附属書:

ナマケグマ (*Melursus ursinus* または、*Ursus ursinus*) は、インド亜大陸 (インド、ネパール、ブータン、バングラデシュ) とスリランカに分布している (Garshelis et al. 1999)。 *M. u. ursinus* と *M. u. inornatusrsinus* 2つの亜種に区別され、後者はスリランカの固有種である。

体色はにぶい黒色で毛深く、胸にU字型の白斑があり、白っぽい鼻をしている。シロアリを食べるのに適応し、突き出せる唇、広い口蓋を持ち、上顎第一切歯を欠くという特徴がある。成獣の体長は140 ~ 190cm、尾長は10 ~ 12.5cm である (Prater 1980; Ward and Kynaston 1995)。オスはふつう80 ~ 145kg でメスは55 ~ 95kg である。

森林、草地、低木林などの多様な環境を利用し (Joshi et al. 1995; Akhtar et al. 2004)。通常は標高1,000m未滿に生息する (Garshelis et al. 1999; Johnsingh 2003)。シロアリ採食に適応しているものの、果実も重要な食物である (Gokula et al. 1995; Joshi et al. 1997)。交尾期は主に5 ~ 7月で、仔は6 ~ 7ヶ月後の11月 ~ 1月に産まれる (Joshi et al. 1999; Chauhan et al. 2003)。産仔数は1 ~ 2頭である。メスは通常、仔を数ヶ月間背中に乗せて運び、2年余の期間一緒にいる (Garshelis et al. 1999)。

(Netrapal Singh Chauhan, Shyamala Ratnayeke)

なお、IUCN レッドリストカテゴリーの日本語訳は、IUCN 日本委員会のホームページ (http://www.iucn.jp/protection/species/redlist_category.html) で定めるものに従った。

引用文献

Akhtar N, Bargali HS, Chauhan NPS (2004) Sloth bear habitat use in disturbed and unprotected areas of Madhya Pradesh, India. *Ursus* 15(2):203-211.

Chauhan NPS, Bargali HS, Akhtar N (2003) Ecology and management of problematic sloth bear in North Bilaspur forest division Madhya Pradesh. A Project Report - Wildlife Institute of India. Dehradun, India.

Fredriksson GM, Wich SA, Trisno (印刷中) Frugivory in sun bears (*Helarctos malayanus*) is linked to El Niño-related fluctuations in fruiting phenology, East Kalimantan, Indonesia. *Biological Journal of the Linnean Society*.

Garshelis DL, Joshi AR, Smith JLD, Rice CD (1999) Sloth Bear Conservation Action Plan (*Melursus ursinus*). In: Servheen C, Herrero S, Peyton B (eds.) Bears: Status survey and conservation action plan. IUCN/SSC Bear and Polar Bear Specialist Groups, IUCN, Gland, Switzerland, pp. 225-240.

Gokula V, Sivaganesan N, Varadarajan M (1995) Food of the sloth bear (*Melursus ursinus*) in Mundanthurai Plateau, Tamil Nadu. *The Journal of the Bombay Natural History Society* 92:408-410.

Horsfield T (1825) Description of the *Helarctos euryspilus*; exhibiting in the bear from the island of Borneo, the type of a subgenus of *Ursus*. *Zoological Journal* 2: 221-234.

Johnsingh AJT (2003) Bear conservation in India. *The Journal of the Bombay Natural History Society* 100:190-201.

Joshi AR, Garshelis DL, Smith JLD (1995) Home range of sloth bears in Nepal. Implication for conservation. *Journal of Wildlife Management* 59(2):204-214.

Joshi AR, Garshelis DL, Smith JLD (1997) Seasonal and habitat-related diets of sloth bears in Nepal. *Journal of Mammalogy* 78:584-597.

Joshi AR, Smith JLD, Garshelis DL (1999) Sociobiology of the myrmecophagous sloth bear in Nepal. *Canadian Journal of Zoology* 77: 1690-1704.

McLellan B (1994) Density-dependent population regulation of brown bears. In: Taylor M (ed.) Density dependent population regulation in black, brown, and polar bears. International Conference on Bear Research and Management. Monograph Series 3: 15-24.

Meijaard E (2004) Craniometric differences among Malayan sun bears (*Ursus malayanus*); evolutionary and taxonomic implications. *The Raffles Bulletin of Zoology* 52(2): 665-672.

Nowak MN (1991) Walker's Mammals of the world. Fifth Edition, volume 2. the Johns Hopkins University Press, Baltimore and London, 1629pp.

Pocock RI (1932) The black and brown bears of Europe and Asia Part II. *Journal of the Bombay Natural History Society* 36(1): 101-138.

Prater SH (1980) The book of Indian animals. 3rd edition. Bombay Natural History Society, Bombay, India.

Servheen C, Herrero S, Peyton B (1999) Bears: Status Survey and Conservation Action Plan. A Book published by the International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, Gland, Switzerland and Cambridge, UK. 309 pp.

Schwarzenberger F, Fredriksson GM, Schaller K, Kolter L (2004) Fecal steroid analysis for monitoring reproduction in the sun bear (*Helarctos malayanus*). *Theriogenology* 62: 1677-1692.

Schwartz CC, Keating KA, Reynolds HV III, Barnes VG Jr., Sellers RA, Swenson JE, Miller SD, McLellan BN, Keay J, McCann R, Gibeau M, Wakkinen WF, Mace RD, Kasworm W, Smith R, Herrero S (2003) Reproductive maturation and senescence in the female brown bear. *Ursus* 14: 109-119.

Ward P, Kynaston S (1995) Bears of the World. London, Blandford.

Wong ST, Servheen C, Ambu L (2002) Food habits of Malayan sun bears in lowland tropical forest of Borneo. *Ursus* 13:127-136.

Wozencraft WC (2005) Order Carnivora. In: Mammal species of the world. Third Edition. Wilson DE and DM Reeder (eds.). The John Hopkins University Press, Baltimore. pp. 532-628.

(下稲葉さやか訳)